特集／中国関連動向

〈1〉すべての道は国家安全に通ずるが如く ～「国安法後」の香港と中国の今

日本経済新聞社　編集委員　川瀬　憲司

「戦前」と「戦後」。日本では、第２次世界大戦での敗戦を以て、大きく異なる２つの時代を区切る言い方をすることがよくある。欽定憲法の下、天皇を君主とし、幾多の戦争を通じて支配地域を広げていった帝国主義国家から、平和憲法の下、主権在民の民主国家となったことで、国家権力と国民の関係や社会の枠組み、世界との交わり方なども根底から変わったためであろう。もちろん、変わらなかった部分もある。しかし、本稿の脱稿が８月１５日の直後だったことが影響しているのかもしれないが、８０年近く経った今も、「戦前」「戦後」という時代の画し方にはなおも一定の意義があると感じている。

では、本稿の主題である香港の場合はどうなのか。１９９７年７月の英国から中国への主権の返還が極めて大きな区切りであったのは間違いなく、「返還前」「返還後」という時代の分け方は適切であろう。

しかし、日本の「戦前」「戦後」のように、実際に社会全体をどれほど変えたのかという観点に立つと、２０２０年６月末に中国当局に押し付けられる形で施行した国家安全維持法（国安法）が、より大きな分水嶺だったのではないかと考えている。

更に今年３月にはより包括的な国家安全条例（国安条例）の施行に至り、「国家安全（国安）」を錦の御旗として打ち立てた、香港における新たな統治体制が確立したともいえる状況が現出している。

主権の返還当初は抑制的な態度をとっていた中国当局が、２０１９年の大規模な反政府運動を契機にその姿勢を完全にかなぐり捨てたことにより、「返還前」「返還後」よりも、香港にとって時代を分けるより明瞭な区切りは「国安法前」「国安法後」になったのではないかとみている。

筆者は現在、３度目の香港駐在中で、過去２回はここで言うところの「国安法前」だった。しかし、今回は２０２０年５月に赴任し、コロナ対策として同月末までホテルの一室で２週間に亘って閉じ込められていた間に、中国の全国人民代表大会（全人代）常務委員会が香港で施行する国安法を可決した。実際にそれが施行された６月３０日夜までの約１カ月を除き、それからの４年あまり、「国安法後」の香港を体感してきた。こうした自身の経験も踏まえ、本稿では、香港にとって大きな分かれ目となった国安法がもたらした、社会の枠組みの大きな変化や、その他の様々な影響について論じたい。

★国家安全に「終わりはない」

「国安法後」の香港の変化を示す事象には事欠かない。脱稿したのは８月１９日だが、８月とその直近数カ月だけでも、実は紹介しきれないほどある。割愛せざるを得なかった事柄も多くあり、それらは別の機会に譲るとして、本稿では筆者が特に象徴的と感じたものを通じて、香港の現状と実相をお伝えするよう努めたい。

国家安全展覧庁（National Security Exhibition

Gallery）が８月７日、香港・九龍地区にある香港歴史博物館の中にオープンした。国家安全を主題にした常設の展示施設で、今やあらゆる事柄が国家安全と結びつけられるようになってしまった「国安法後」の香港を、目に見える分かりやすい形で示してくれている。

８月７日、香港・九龍地区の香港歴史博物館の中に、国家安全をテーマにした常設展示施設「国家安全展覧庁」が新たにオープンした。（写真＝川瀬憲司）

香港政府トップの李家超（ジョン・リー）行政長官は対外開放前日の同６日に行われた開幕式典で「国家安全は前に進むのみで、終わりはない」と述べた。李長官によると、香港には激変する国際環境の中において「外部勢力による封じ込めや圧力」が続いているという。国家の安全を守る責任や義務がある政府や市民に対し、新たな常設施設を開設した意義や重要性などを改めて強調した。

国家安全展覧庁は、李長官自らが昨年１０月の年次の施政方針演説で設置を公表していた。いわばトップ肝煎りの香港政府にとって最重要事業の１つといえる。

「国家安全教育を全面的に高めることは、国家の安全を守るうえでの重要な部分」と語った李長官は、新たな施設をその目的のための重要なインフラの１つとして最大限活用していく考えを示した。「（香港）特別行政区の各機構や組織、社会各層、大学、専門学校、小中高校、青少年団体の国家安全展覧庁への参観を通じ、全市民を対象とした国家安全教育を更に推進するとともに、市民が自ら進んで国家安全を守るという意識と覚悟が強まることに期待したい」と語り、社会の幅広い層による利用を呼び掛けた。

この考えを踏まえ、入場は無料。休館日もわずかで、公休日と重ならない火曜日、それに旧正月とその翌日のみ。それ以外は毎日、朝１０時に開館し、曜日によるが夕方の５～７時まで開いている。学校などの団体を対象とした館内ガイドも、事前に申し込めばタダで提供するというサービスぶりだ。

この施設のために、博物館２階の１、１００平方メートルを超えるスペースを割り当てた。大型のスクリーンを使ったビデオ映像や子供を対象にした生き物のキャラクターを用いたアニメ、ロケットなど大型の模型といったビジュアルな道具も駆使し、国家安全に関するテーマを大きく６つに分けて展示している。

「国家安全展覧庁」には既存の香港歴史博物館２階の１１００平方メートルを超えるスペースが割り当てられ、国家安全に関するテーマを大きく６つに分けて展示している。（写真＝川瀬憲司）

★特別基金２５００億円は藪の中

開幕式典に出席した警察や国安部門の元締めである鄧炳強（クリス・タン）保安局長は、記者団からこの施設への動員数に関する政府としてのＫＰＩ（重要業績評価指標）はあるのか問われると「我々は１年で１０万人を超す人々が参観に訪れると想定している」と述べた。さらに、「費用については、国安法の規定に基づき、政府の歳入の中から国家安全に関する事業に充てることができる」とし、「国安法後」だからこその政府事業である点を強調した。

もっとも、記者団から尋ねられた、建設費用や運営コストはいくらなのか、つまりどれだけ税金を投入することになるのか、との問いには「国安法に基づき、開示することはできない」と語った。

鄧局長の発言の拠り所は国安法１９条だ。行政長

官の承認を経て、税金を国安関連の支出に充てることができるようにした条文だが、その中に「香港特別行政区の現行の関連法規の制限を受けない」と規定している。同時に、財政長官に対し「この支出項目を抑制、管理し、毎年立法会に報告しなければならない」との義務を課しているのだが、陳茂波（ポール・チャン）財政長官が今年２月に立法会に提示した今年度（日本と同じく４月からの新年度）予算案の支出一覧にある唯一の関連項目「国家安全擁護のための支出に関わる特別基金」の金額をみると「―」となっている。

２０２２年度予算では５０億香港ドル（現在価値で約９５０億円）が割り当てられたことがその一覧表に示されているのだが、その翌２３年度と現行の２４年度については「―」となっている。

本項目の注釈によると、２２年度の５０億香港ドルは、「国家安全擁護に関する支出に充てる特別基金の増額のための非経常的な割り当て」との説明がある。

「国安法後」最初の新年度予算だった２０２１年度分の編成作業に際し、進行中だった２０年度予算の中に、香港政府がこの国安特別基金に既に８０億香港ドルを割り当てていたことが判明している。つまり、事後的に明らかになったのだが、香港政府は２０２１年２月２５日、記者団からの質問に答えるという形で声明を発表し、この８０億香港ドルは国安法１９条に基づき「今後数年の国家安全を守るための支出に使われる」とし、既に陳長官の裁可の下で支払われたことを明らかにした。立法会への説明については「いずれ（中文は「稍後」、英文は「in due course」）」行うとし、議会報告は具体的な時期も明示しないまま事後で済ませるとした。

２２年度分の増額により、現時点で分かっているだけで１３０億香港ドル、おおよそ２５００億円もの税金が特別基金に回され、議会のチェックなしで自由に使える状態にあるということになる。

国安法の施行直後、中国駐香港特別行政区国家安全維持公署（国安公署）という、香港に４つめとなる中央政府の出先機関が新設された。国安法に基づき、中央政府直轄で香港における国家安全に関する情勢を研究・分析し「重大な戦略や重要な政策」への意見具申や、香港政府が国家安全擁護という「職責」を全うするための「監督・指導・協調・サポート」を行うことなどが規定されているのだが、この機関の諸経費は北京の中央政府が財政負担することが国安法の別の条文に明記されており、特別基金からは出ないことになっている。

中国駐香港特別行政区国家安全維持公署（国安公署）は国安法の施行直後、香港に４つめとなる中央政府の出先機関として新設された。この建物はそれまで中国国有企業が運営するホテルだったが、突如営業を取り止め、国家安全を取り仕切る機関となった。（写真＝川瀬憲司）

「国安」という名目さえつけば、特別基金から相当なカネをつぎ込めるということが分かる。より重要なのは、英国植民地時代に培い、香港の国際的な信頼の重要な源泉となってきた「法の支配」に大きな抜け穴を作りかねないような法律が既に導入され、運用が始まっているということではないだろうか。

ちなみに、国家安全展覧庁の設立主体も、国安法の規定で香港政府内に新設された「国家安全維持委員会」だ。これを、中央政府の出先機関である中国駐香港特別行政区連絡弁公室（中連弁）と国安公署が「支持」する形となっている。

★習氏の「総体国家安全観」が基本原則

博物館内の長い専用エスカレーターを上り、展覧